

知求会ニュース

2025 年 5 月

第 94 号

◎ 博士後期課程 博士号取得、おめでとうございます！

尾立素子さん（社博第 17 号）が、2025（令和 7）年 3 月 25 日（火曜日）に授与された張喬さんに続いて博士（国際学）の学位を授与されました。なお、尾立さんの論文要旨などは「博士録 67」に掲載されていますので、併せてご一読下さい。尾立さんは旧国際学研究科から地域創生研究科に組織替えになっての初の博士号（国際学）取得者になります。

これまでの国際学部・国際学研究科（修士課程および博士前期課程）・地域創生科学研究科（博士後期課程）出身者の学位取得者は、博士（国際文化）（東北大学）2 名・博士（文学）（名古屋大学）/（筑波大学）/（東北大学）4 名・博士（人文科学）（お茶の水女子大学）1 名・博士（人文学）（パリ東大）1 名・博士（芸術学）（筑波大学）1 名・博士（社会学）（一橋大学）2 名・博士（農学）（東京農工大学連合大学院）2 名・博士（国際学）（宇都宮大学）26 名・博士（経済学）（名古屋市立大学）1 名・博士（観光経営学）（慶熙大学校）1 名・博士（人間・環境学）（京都大学）1 名・博士（学術）（杏林大学）/（筑波大学）/（東京大学）/（一橋大学）/（法政大学）/（三重大）/（宇都宮大学）11 名・博士（国際開発学）（名古屋大学）1 名・博士（国際関係・紛争・平和学）（キングス・カレッジ・ロンドン）1 名・博士（経営学）（立命館大学）1 名・博士（医学）（自治医科大学）1 名の計 58 名です。なお、下線部分は追記した部分です。（2025 年 5 月 1 日現在）

◎ 博士後期課程、入学おめでとうございます！

国際学研究科博士後期課程の後継である地域創生科学研究科 博士後期課程 先端融合科学専攻グローバル地域デザインプログラムに、眞壁希予さんが（国際交流研究専攻第 15 期生）入学されました。今後の研究成果を期待しています。

◎ 博士前期課程、入学おめでとうございます！

国際学研究科博士前期課程の後継である修士課程 地域創生科学研究科 社会デザイン科学専攻グローバル・エリアスタディーズプログラムにおいて修士（国際学）5 名および多文化共生学プログラムにおいて修士（学術）6 名が入学されました。

研究室訪問 62 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「ジェンダー：時代の足音を捉えるアプローチ」

李 亜姣

昨年話題となった NHK 連続テレビ小説『虎に翼』の重要な舞台の一つである「明律大学女子部」のロケ場所は、宇都宮大学の峰ヶ丘講堂だったことはご存じでしょうか。本作は、日本初の女性弁護士「三淵嘉子」をモデルした主人公猪爪寅子の人生を描きました。「男尊女卑」の旧習を打破し、職業的女性として社会に進出していく寅子の姿に多くの視聴者が感銘を受けた。ある性別を特別の役割に結び付けたり、男／女だから〇〇すべきと考えたりするような考え方を指す言葉として「ジェンダー」という概念があります。

ジェンダーは自然なもので生まれつき決まっていることだと思われがちですが、社会や文化、時代の変化に影響され、変容してきました。『虎に翼』の寅子は、「女だから良妻賢母になるべき」ということに戸惑って、自ら変えようと挑戦しました。また、『虎に翼』の週タイトルはジェンダーに関することわざや慣用表現に「？」をつけたものになっている。例えば、「女性は三界に家無し？」「女賢しくて牛売り損なう？」「女三人寄れば姦しい？」等があります。「？」はジェンダーに対する戸惑いや不満の表れではないでしょうか。

私はお茶の水女子大学の院生時代からずっと女性の経済的権利に「？」をつけながら、ジェンダーの視点から研究しています。特に、中国女性の土地をめぐる権利の剥奪問題——^{のうかじょ}農嫁女問題に焦点を当てて研究を行っています。簡単に説明しましょう。中国改革開放以降（1978 年～）、都市化、工業化が進むにしたがって、農民たちが利用していた土地の略奪が強化されました。地方政府は非常に低い価格で農民から土地を収用しましたが、そうした土地収用に対する補償金は、村のなかで村民たちの間で分配されました。その際に、村役場は「女性が結婚したら、夫の村へ移住すべし」という伝統的なジェンダー秩序に基づいて村内での分配のルールを制定しました。そのため、一部の女性やその子供が土地収用に対する補償金の分配等から排除されました。そうした女性たちは「農嫁女」とも呼ばれます。彼女たちも「女性が結婚したら、夫の村へ移住すべし」という慣習に「？」を付けながら、対抗運動を繰り返しました。私は、現地に赴き、資料収集やフィールド調査を行ってきました。2022 年、『現代中国の高度成長とジェンダー——農嫁女問題の分析を中心に——』という単著を東方書店で出版しました。

もう一つの研究テーマは、「金融化」と「過剰包摂」に関するものです。2012 年以降、中国では金融化が過度に推進された。多くの男性が借金をして事業に取り組むが、最終的には事業が失敗し、借金の返済を妻が引き受けざるを得ないという状況が起きます。この

ような過剰包摂のメカニズムにおいて、国家や法制度などが果たす役割を明らかにすることが目的です。なぜ「男が借りて女が返す」という構図が生まれるのか——これが私の研究が明らかにしようとしている問いです。

私にとって、ジェンダーは時代の足音を捉える重要なアプローチとなります。みなさんはどうということわざや現実生活に「？」を付けながら、挑戦していますか。機会があれば、ぜひ聞かせてください。

(2025 年 4 月 20 日原稿受理)

博士録 67 第 22 号から国際学部、国際学研究科に関係する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「人道開発支援者による性的搾取・虐待からの被害者/サバイバーの保護： 進捗と課題」

尾立 素子

【論文要旨】

本研究は、2002 年から国際人道開発支援分野において性的搾取・虐待からの保護 (Protection from Sexual Exploitation and Abuse(PSEA)) が取り組まれているにもかかわらず、なぜ、未だに性的搾取・虐待 (Sexual Exploitation and Abuse(SEA)) が継続しているのか、どのようにしたら、PSEA が、実質的に SEA の防止および SEA 被害者/サバイバーの回復に貢献できるのかという課題を考察した。

2003 年の国連事務総長告示での SEA の定義を参照すると、性的搾取とは「性的な目的のために、地位の脆弱性、権力格差又は信頼を実際に濫用すること又はその試み」とあり、性的虐待とは「力の行使による又は不平等若しくは強制的な状況下における、身体の性的侵害行為又はその脅威をいう」とされている。

SEA の具体的な事例には、支援従事者が、支援物資との引き換えに、支援対象者に対して性的行為を求める例がある。その他、支援従事者という立場を利用して、支援対象者へ性的な行為を求めるという性的虐待も問題視されている。

全ての SEA 行為について 2003 年以降は国連事務総長告示により禁止されているが、未だに SEA は深刻な問題であり、そうした事案があるたびに欧米メディアで報道されている。このような背景に鑑み、本研究では PSEA を実施しているにもかかわらず、SEA が継続し PSEA が形骸化する理由および PSEA の実効性を高めるための対策について検証した。

具体的な研究方法としては、PSEA に関する学術文献、政府・国連機関・NGO 等による一次資料の分析を行い、PSEA が形骸化する理由を整理した。なお、文献調査に加え、筆者は 88 人（支援従事者 31 人、支援対象者 57 人）のオンラインおよびオンサイトの

インタビュー調査をバングラデシュ・カンボジア等で実施し、それらの分析も通じて、PSEAの問題を明らかにし、PSEAの実効性を高める対策を検証した。

本研究の検証を経て、PSEAの形骸化を克服するためには、よりSEA被害に遭う人たちの立場にたったPSEAの実施が必要ということが確認された。SEA被害に遭う人たちは、十分な教育機会を得ておらず、日々の生活に困窮しているため、自分を大切にし、自分の権利を守る方法についての十分な知識を持っていない。そのため、SEA被害に遭っても、それに耐えてでも生活を維持せざるを得ない状況にある。そうした被害リスクのある人たちがエンパワーされるように、生計向上支援および心理社会的支援などを通じた自己肯定感及び自己効力感を向上する支援の必要性が確認された。なお、SEAが起こる背景にはジェンダー規範による女性への差別および民族・障害等にもとづく差別もあるため、そうした差別をなくすための取り組みの重要性も確認された。

【後輩に向けた助言・メッセージ】

これから論文を執筆する皆様へのメッセージとして、いくつかお伝えします。

第一に、お仕事をしながら執筆を考えていらっしゃる場合、早めに論文の構成を決めて、執筆を開始することを勧めます。自分で考える以上に、執筆には時間がかかることを念頭に入れておくとういと思います。論文の提出時期にまとめて仕事を休むなどができるならば、そういった工夫もなさることもお勧めします。

第二に、もしも、研究のために海外での調査が必要となる場合など、そのタイミングの設定は仕事との兼ね合いで難しいと思います。しかし、職場の人達たちへ研究の目的・意義などを説明し、理解をいただくことで、海外での調査と仕事の両立も可能だと思いますので、丁寧な調整をお勧めしたいです。

第三に、できれば、ご自身の研究内容について、多くの人達に話をする 것도大切だと思います。まったく異なる学問・職業分野の人たちであっても、関心をもって聞いてくれ、自分とは異なる視点を提供してくれることがあるためです。私の場合は、多くの人に博士論文を書いていることを伝えることで、論文を仕上げて提出せざるを得ない状況をつくることができ、それは良かったと思います。

最後に、もしも博士課程の途中で、ご自身が執筆している論文の纏め方が適切なのか、最終審査を通過できるのかなど不安になった場合は、すでに博士号を持っている人などに、ご相談すると良いと思います。すでに学位を取った先輩であると、問題解決の具体的な方法も教えていただけますので、とても助かると思います。

それでは、末筆ではございますが、以上となります。後輩の皆様のご健闘を心から願っております。

(地域創生科学研究科 博士後期課程 先端融合科学専攻
グローバル地域デザインプログラム 修了)

(2025年4月20日原稿受理)

知究人 37 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 35 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 32 第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 23 知求会ニュース第 41 号より現役学部生・院生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「スリランカと私」

丸山 浩平

令和 6 年度に国際学部を卒業いたしました、丸山浩平と申します。国際学部設立 30 周年記念動画・フォトイメージコンテストでは、留学生と宮祭りに行った際に撮影した写真でグランプリを頂きました。入学当初はコロナ禍で同級生とさえ交流ができませんでしたが、その後はこうして海外から来た留学生とも親交を深めたり、ともに学んだりできるようになり大変感慨深く思います。改めまして、設立 30 周年という記念の年にこのような素晴らしい賞を頂きましたこと、心より感謝申し上げます。

さて、私が大学生活を通じて最も深く関わったのは、スリランカの紅茶産業を支える「農園タミル」と呼ばれる人々に関する活動でした。農園タミルとは、植民地時代に南インドから労働力として連れてこられた人々の子孫であり、現在も多くが山間部の茶園で暮らしています。こうしたコミュニティの子どもや若者を対象に、学習支援や地域行事を通じたエンパワメントを目指す JICA 草の根技術協力プロジェクトが、私の入学前から国際学部の栗原俊輔准教授を中心に実施されていました。私はその学生連携団体「UU-TEA」の一員として、現地の若者とのオンライン交流を企画したり、プロジェクトの成果報告書を作成したりするなど、継続的に関わるようになりました。

こうした活動を重ねるなかで自然と関心が深まり、卒業研究では農園タミルの若者たちが抱くアスピレーション（将来への願望）に焦点を当てることにしました。インタビューやフォーカスグループ・ディスカッションを通して見えてきたのは、彼らが経済的・社会的な困難に直面する一方で、インターネットや SNS の普及により、外の世界とつながることで自らの可能性を切り拓こうとする姿でした。そのたくましさに強く惹かれると同時に、

彼らのまなざしに真正面から向き合うことの難しさや、自分の未熟さを痛感する場面も少なくありませんでした。

ふと立ち止まって振り返ってみると、私自身がこれまで受けてきた支えの大きさに気づかされます。身の回りの環境や出会いの一つひとつが、現在の自分を形づくってきたのだとを感じるようになりました。このような思いを抱くようになったのも、農園タミルの人々との出会いや、活動を通じた他者との関わりがあってこそだと思います。大学での4年間は、こうした関係性のなかで自分の視野が少しずつ広がっていく過程でもありました。

このたび、ありがたいご縁が重なり、JICA 海外協力隊員として再びスリランカに渡る機会をいただきました。新たに採択されたプロジェクトは、対象地域は前回と異なりますが、前回のプロジェクトに携わった現地関係者との連携のもと、同様の取り組みを進めていく予定です。私は若年で経験も浅く、どこまで貢献できるかは未知数ですが、プロジェクトの効果を最大化する一助となれるよう努めたいと思っています。また、同世代の外国人という立場が、現地の若者たちのキャリア形成の刺激になればと願いながら、これからの日々を丁寧に積み重ねていきたいと考えています。

追記：UU-TEA は Instagram で紅茶農園のようすを日々発信しております。もしアカウントをお持ちでしたら、「UU-TEA」で検索してフォローしていただけますと幸いです。

(国際学部国際学科 第5期卒業生)

(2025年4月18日原稿受理)

キャリア指南15 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2025年の卯月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。)

「青年海外協力隊よ、社会の変革者となれ！」

群馬県青年海外協力隊を育てる会

理事 矢島 亮一

JICA 青年海外協力隊事業は、1965年に創設され、「開発途上国の人々のために活動したい」と望む日本人が参加して参りました。これまでに99か国に5万6000人以上の方々が派遣されており2025年には、青年海外協力隊発足60周年を迎えようとしています。創設当初から、開発途上国の人々のために活動するという、開発途上国へ一方向だったJICA 青年海外協力隊事業も時代を経て、大きく変わってきています。

現在、我が国における状況は、少子高齢化、人口減少、過疎化、外国人労働者問題、担い手不足、ダイバーシティなど日本の社会課題が山積するなか、日本社会は課題先進国から課題解決先進国へ変わっていかねばなりません。

そのような時代を経て、JICA 青年海外協力隊を経験した若者がその経験を生かしながら日本国内外の社会課題の解決や、SDG s (Sustainable Development Goals)への貢献に取り組んでいる方々も現れています。まさに、開発途上国へ一方向だった活動が多面的な活動に変わってきているのです。

改めて JICA 青年海外協力隊事業には様々な価値があるが、最も重要なことは日本の未来を支えていく若者の人材育成をしているという点ではないでしょうか。

JICA 青年海外協力隊員は開発途上国の知らない土地に行って自ら課題設定をし、様々な人とコミュニケーションを取りながら、見ず知らずの土地で現地の方々と人間関係を構築し、様々な取り組みに挑戦をする。その過程において、隊員たちは何度も失敗し、悔し涙を流しつつも精一杯活動し、時には小さいながらも成果を得られる機会もある。まさに国境をこえたダイナミックな意欲が培われているのです。

すなわち、青年海外協力隊事業は開発途上国のためだけではなく、日本に必要な未来の人材を育てており、そのような若者たちが帰国してからも様々な分野と地域で活躍しています。

そんな帰国隊員が活躍できる受け皿として、世界の中の「群馬県」として帰国隊員に選ばれる地域となり積極的に JICA 青年海外協力隊を支援する役割は極めて重要であります。宇都宮大学大学院を修了後、大分時間が経ちましたが、2024 年度より群馬県青年海外協力隊を育てる会理事として微力ながら JICA 青年海外協力隊を応援しております。

これからは関係者の皆様のご指導ご鞭撻を賜り、当会発展のために活動して参りますので、変らぬご支援ご協力のほど、よろしくお願い致します。

(国際学研究科国際交流研究専攻 第 4 期修了生)

(2025 年 3 月 22 日原稿受理)

東南アジア支部だより

第 63 号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第 1 期生・国際学研究科国際社会研究専攻第 1 期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019 年 4 月から、年 4 回から年 2 回発行(4 月 1 日、9 月 1 日)の変更になりました。

EU 支部だより

知求会ニュース第 38 号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会 EU 支部

「Newsreel World」を発行してきました。今回の「Newsreel World」54 号の内容は、

1. イタリア 2025 年大阪・関西万博 2. EU 支部だより 一万博後の夢洲一です。

編集者のひとりごと

●昨年度末はあわただしい年度末でした。それは、2年間二重生活していた前橋のシェアハウスからの引っ越しと、次の仕事の就活に追われていたためでした。教育DX推進事業の次年度継続がかなわなかったためです。自治体が管轄する予算の縮小などの影響だったと推察しています。

●実家のポスター掲示板は、生前の父が栃木県美術館友の会の関係で、永らく継続して企画展のポスターを掲示してきました。しかしながら、昨年末から、突然ポスター掲示の郵便物が届かなくなりました。問い合わせをすると、事業予算の縮小により配送を取りやめたとのことでした。何の案内もないのは少し残念な気持ちです。私は父の意向もあったので、美術館に取りにいくことで、継続してポスター掲示をしています。

●就活は主にハローワークを中心に行ってきましたが、なかなか芳しくなかったのも、民間の求人検索「Indeed」「求人ボックス」の2つを使い就活をしました。思いのほか、求人情報はたくさん出ていました。民間のほうがスピード感を求められていた印象です。Web面接を経て、2週間後Web研修を行い翌日から現場を訪問するという流れです。仕事は県のICT支援員ですが、およそ4分の1の人数で巡回しなければなりません。

●今回の仕事には縁があります。これまでは、GIGAスクール初年度（5年前）に所属していた会社が運営していましたが、入札で東京の会社（私が所属することになった会社）が受託しました。

●車検など自動車でお世話になっている会社が、4月から社名が変わりました。聞くと、社長が高齢で事業承継されて、社名が変わったとのことでした。この新年度はいろいろなところで、変化の兆しがありました。

●これまで、ICT支援員は1年、教育DX推進アシスタントが2年、県ICT支援員はなんとか最低でも3年間は継続していきたいと思っています。ことわざに、「石の上にも三年」とあります。

●今年は当年にとって72歳になりました。また、年男（^{みずのと}癸・^{へび}巳）でもあります。十二支も6巡目をむかえて、7巡目に向かいます。巳（へび）なのでよき脱皮をして、前向きな年にしていきたいです。

●パソコンのWindows10のサポートが10月14日で終了します。みんな、対応されていますか。新しいOSはWindows11です。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は 国際学部同窓会 HP (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。**chikyukai@gmail.com
